

故マックス・フリッシャイゼン・ケーラーの

教育學界に於ける効績

伊 藤 猷 典

氏に就ての訃告は「カント研究」の第廿八卷の表紙裏に記載され、更に同第廿九卷の巻頭に於て氏の師ルドルフ・レーマンによりて氏の經歷學說の大意が掲げられた。自分は今氏につき教育に係あるもののみを少しのべたいと思ふ。

氏のものせる教育に關する論文は

1. Meister und Schüler, Ideen zu einer Philosophie der Erziehung

2. Über die Grenzen der Erziehung

3. Grenzen der experimenteller Methode. (1)

は前掲のレーマンの文中に記載せるものによりしがヘルゲットが Die wichtigsten Strömungen im

Pädagogischen Leben der Gegenwartに記載せる

ものには Grenzen des experimentellen Verfahrensとなつてゐる。レーマン及びヘルゲット兩氏が紹介せる内容から察すると兩者は同一のものを思はれる。何れが本當であるのかは原本を持たない自分には判らない。

4. Philosophie und Pädagogik

5. Pädagogik und Ethik

6. Bildung und Weltanschauung. Eine Einführung in die Pädagogischen Theorien. 1921.

の六種あるようである。(1)は一九〇〇年に書けるものなるが未だ出版はされないのでレーマンの手

許にあるのだから詳細につきては知る事は出来な
い。

(2)に就きてはレーマンが前記のカント研究中に
(5)に就きてはヨース・ローンが *Geist der Erzie-
hung* に數行を費して要旨を説いてゐるが、甚だ簡
單であるし自分は原本もまだ見ないであるのだけ
ら只論文名を記載するに止めて置く。

(6)は(4)をば改作増補したものである。余が昨年
本紙の一月號に掲載せる論文は其際明記せる如く
主として(4)に依つたものである。氏が(4)に於て歴
史上に表はれた諸家の教育説を経験的の立場と哲
學的の立場とに二分し且その各々に於て論理的段
階に秩序づけ最後に兩方から歴史の領域に論理的
必然を以て導き入れ教育獨特の立場を明かにせん
とせる手際の鮮かさは真に驚嘆の外はない。(6)が(4)
よりも何れの點に於て優れるかを詳しく紹介する
は今の場合の義務ならんも、そは又後日の機會に

譲り、教育學の方法論を研究せんとするの士は是
非一讀の必要ある事を附記するに止めて置く。

今自分が紹介したいと思ふのは(3)である。實は
(3)もまだ原書は手に入らないので充分な自信はな
いわけだが、前記ヘルグットの紹介が可なり詳し
いので、且それが、(4)に於てモイマンの實驗教育
學に對してなせる批判とその要旨は一致してゐる
のでヘルグットの紹介も大體誤らないものと思は
れるから、そして今一つの理由は世の所謂實驗教
育學者は是非一讀せねばならぬ論文と思ふから、
該紹介を出来るだけ誤なく左に紹介する事とす
る。

『フ氏の教育に關する論文は前記六種の外に猶ほ
Quellen-Handbücher der Philosophie 中に *Pädagogik*
と題し氏が執筆しやがて出版さる旨の廣告が「カ
ント研究」廿八卷の卷末の廣告に出てゐたが同廿
九卷に掲載さる同書の廣告にはフ氏の名が除かれ

て Aloys Fischer の名が代りに置かれてある事を見るときこれはものにならぬらしい。多大の期待を
持てゐたこの書が單なる計畫として F 氏の死と共に

に永久に葬らるゝ事は我等に取て非常な痛恨事である。』

教育に於ける實驗方法の限界に就て

實驗は教育學に於てどれだけ採用され且その限界は何處にあるかを マックス・フリッツ・シャイゼンケラーがその研究 *Grenzen des experimentellen Vorfahrens* に於て論じた。氏は實驗をば十六、七世紀時代の研究から得た自然科學的精神の産物と見做し、それを定義して曰く、認識の疑問の解答の爲に設けられた、繰返しうる過程の科學的觀察にして、該過程は吾人が任意に孤立させる事が出来、それを設ける事も吾人が定め、又その経過は、吾人が監視し且任意に変更しうる如き條件の下に屬すること。氏は事物の一般過程の確立に就ての實

驗をば *Forschungs-experiment* と稱し、個々の事物の特性の研究に就ての實驗をば *Prüfungsexperiment* と稱した。氏によれば心理學に於ける實驗の可能なる事は最早疑ふ事は出来ない、このことは特に精神生活の個々の現象に對する法則、從て普通心理學に對する法則を定むる事の出来るのを見る時には、氏は心理的實驗の難點は被験者と社會との關係、精神上の團體生活との關係を絶つ事にあるとした。最も簡單なる精神現象を研究し得る爲には前記の諸關係が今研究せんとする現象に對し如何程影響を與へてゐるかを知らねばなら

ぬ。がそれは恐らく可能であるだらうが高等の現象にありては非常に困難である。歴史的発展中の出来上つたもの、例へば言語、國語の形式、風習等は個々別々に研究する事は出来ない。従て歴史的關係を離れ單に個人のみを取扱ふ普通心理學は民族心理學によりて補はれなければならない。民族心理學とは前記の關係を顧慮し且言語、風習、藝術等の歴史的発展に就ての心理的法則を求むるものである。普通心理學は猶其外に精神過程が寫象せる内容に立ち到て研究する觀察方法をも用ひねばならぬ。

前記の氏の説によれば、主として簡單な精神現象を取扱ふ實驗心理學は云はゞ心理學の一部分にすぎなくて決して心理學の全般ではない。この事の確立せる事は實驗教育學を正しく評價するものに取て非常に重要なる意義を與ふ。何故ならば實驗教育學は實驗心理學から出發し且それに基いて

ゐるのであるから。實驗教育學も亦度々云はるゝ如き眞の教育學とは見做されない、只一領域として、一定の意味に於ての觀察法としてのみ存在根據を有する。

實驗的作業が教育學に於てどれ程迄に應用せられうるかといふ疑問の解決は、個々の兒童精神と他の精神との區別並にその漸次的發展が實驗的に研究されうるか否かといふ點に懸つてゐる。何故ならば教育學は個人個人を取扱ふのであるから。氏は曰く兒童學に於ては *Forschungsexperiment* よりも寧ろ *Prüfungsexperiment* が採用される。だが

後者はその及ぶ範圍は普通心理學よりも遙かに廣い。結論を爲すに當ては大なる注意を拂はんければならない。何故ならば外部的の實驗からしては即座には、根本に横はる能力(例へば言語の如き高等なる能力にありては、その人の教育史全體に依存する故に)を決定する事は出来ない。而もこ

れを研究する事は個性の研究に取て忽にすべからざる事である。より高等な素質の研究に到ては實驗は役に立たない。従て藝術的素質、道徳生活、社會に於ける生活等に對しても同様に實驗は問題とはならない。

前述の兒童學に於ていふ實驗をして意義あらしめる爲めにそれは狹義の實驗教育學の實驗でなければならぬ。今いふ「狹義の實驗教育學とは教育過程其物を實驗的に研究し、教授並に教育方法を組織的に且比較的に研究し、教育目的に適つた正確なる標準を得るべく求める事である。」氏はこゝで實驗的作業の限界に就て曰く「總ての高等なる人格的生命の成立、道徳的宗教的人格の教養、個人をば歴史的社會生活内へ入るべく教育する事並に靈的世界をば文化體系に對する相關々係に於て建設する事などは直接な實驗的分解をなし得るものゝ圏外にあるとするならば、それは同様に狹義の實

驗教育學の圏外にあると云ひうる。品性や人格の學としての教育學と授業の學としての教育學とを區別するならば、本來の教育問題は實驗教育學の研究範圍外にある事を恐らくは一般人も主張するであらう。一時代の教育體系を動かすような大問題は實驗教育學からは理解せられないであらう。個人教育と社會教育との對立、智育と美育との對立、人道主義と實利主義との對立、政治的陶冶と宗教的陶冶との對立等此等の重要な教育問題は、實驗的方法で決定しうるような領域の外にある。」

教師の人格的影響を實驗的に確定することは不可能である。教師の人格を實驗教育學の觀察に取て限界概念であるゴフリツシヤイゼン・ケーラー氏の云へる事は正しい。諸種の教授課程を一層容易に取扱ふ方法や、又一層よき結果に迄導きうる方法などは成程確定しうるであらう。——これは實

驗的教授術の主要問題である。——けれども諸種の道徳教育には役立たない。實を云へば教授課目の成立もその課目を測定する價值に依存するのである。

氏はその價值多き論述の結論に曰く、「嚴密なる方法論的意味に解するならば、本來の教育課程に實驗を應用する事は前述の理由からして多くの結果を得る事は期し難い。授業の方法が一定の方面で兒童の上に影響しうる事を組織的に實驗しうる事は明かに許されうる。けれどもこの事が、心理學的實驗の範に従ひ、管理すべき作用を出来るだけ分解する事を念頭に置く時、換言せば練習せられ教養せらるべき基礎機能を分解する事を念頭に置く時にのみその目的を達しうる時、かく云ふは非常な謀叛の如くに思へるが、それは單に初等教授の手段たるにすぎない。其需要の多きは最も早くに邪魔になる條件を排除し教授に都合よ

からしむるからである。實驗教育學の將來は精神作業の一般衛生並に特殊技能の合理的會得に就ての技術の方向にある。それは醫學と結合して治療教育學に對し貢獻をなしうるであらう。けれどもそれがそれ以上に吾人の教育の改革に對しより大なる影響を與へうるといふ事は非常に疑はしい。」何故ならば實驗教育學な實驗心理學と同様に人間をば單に自然に即せる方面のみから見るのだから、けれども人間は精神歴史の世界にも屬する。氏は次の事を云つて實驗教育學を過重する事を誡めた。

「實驗教育學は人を邪路に誘ひ自然科学的經驗の假定が既に遠くの昔に見捨てた場所にありても猶自然科学的正確性を正しく保持しうるかの如くに思はしめる。實驗教育學は技能の會得や智的生活の教育の一面には利益を與へうるが、情緒並に意志生活を充實したり、深める事には效を奏せない。それは又教育學的興味を中心をば初等教授の問

題におく、從て高等教授並に本來の教育の問題は等閑に付す傾向がある。又古代啓蒙期の教育學の意味に於て兒童の天性に絶對的に適應するといふ事になりやすい。けれども成熟者の文化並に高等教育に兒童を適應させようとする拒否し難き要求と自己の天性と戰ふ事に於て矛盾に陥る。」

ヘルゲット氏の紹介は以上にて盡きてゐる。原本にはまだ有益なる個所があるかも知れぬがそれは原本を得た後、何かの機會にのべる事とする。前記の文のみにては教育學者に取て得る所の如何に多きかは何人も容易に首肯し得る事と信ずる。フ氏の所説に缺陷を見出し得ない。自分が前文を紹介するに當り希望する所は現今の實驗教育學がフ氏の稱する限界以上にどれだけ突破したかを實驗教育學者の側から教へて貰ひたい事である。かく

云ふはともすれば誤解され易き輕侮の念から云ふのでなくして自分が實驗教育學の現状に暗いが爲に、それを知りたいとの學的興味から希ふのである。

要之にフ氏が教育學の方法論上に一大開拓をなした事はナトルプの「社會教育學」や「哲學と教育」の效績に比肩すべく、教育の實驗的過程の限界を明確にせる事はモイマンやライ等の實驗教育學者の積極的效績と並び稱すべきものでなからう歟。

寄贈書籍雜誌

マックス・ヴァーバー
立體派の詩

篠崎初太郎譯
大阪異端社

哲學雜誌、丁酉倫理講演集、日本心理學雜誌、觀想、教育研究、内外教育評論、學校教育、教育時論、彌王樹、三田文學、信濃教育、東亞之光、教育學術會、支那學、東洋思想研究、社會學雜誌、講座、